この街の雑踏をひとり歩くたび、YUKIはいつも不思議に思っていた。

(みんな何を見て歩いてるんだろ。きっと誰も何も見て歩いていないんだなあ)

ビル群に遮られた空は切れ切れで、ちっぽけに映る。

上京して1年。だが、函館の広い空しか知らない彼女にとって、東京の街の空は孤独を感じさせるものでしかなかった。  
 冷えた夜の風に体が震える。さっきまでライブハウスのステージに立っていたのである、汗のひいていかない体に初春の風が冷たい。

「全然ダメ。TAKUYAダメだ、もっとうまくなれ」

「まぁいちばん最初にしては、みんなまぁまぁだったから。頑張ろう」

YUKIはくちびるの震えるのをこらえて、ディレクターである山中幸夫とプロデューサー成瀬正都の話を聞いていた。

が、どんな言葉も体のなかを通り抜けていくみたいだった。

1993年3月1日、新宿ロフト。

恩田快人も五十嵐公太もTAKUYAも踏んだことのあるステージ、しかしYUKIはここへ来るのもこのステージに立つのも初めてだった。

(こんなちっちゃい所だったんだ、すごい!)

シーナ&ロケッツ、ルースターズ、ブルーハーツ。楽屋に入り、壁に記されたサインを前にしたとたん、YUKIは思わず息をのんだ。

「やっぱりすごい!! みんな通る所なんだね!」

JUDY AND MARYはインディーズ盤ですでに発表していたオリジナルを数曲と、バナナラマやビートルズのカバー曲を演った。ミニスカートにドクター・マーチンのワーク・ブーツで足を踏みならし、おかっぱ頭の黒髪を振り乱して、YUKIは歌った。

しかし、会わない。演奏も自分の歌も、どうも音の通りが悪い。今日はスタッフのみんながそろって観に来ているというのに、英語の歌なんてメチャクチャだ。その仕上がりはさんざんなものだった。

楽屋へ引き上げるや、すぐにマネージャーの堀江正樹から楽屋口まで行くようにと追い立てられ、ライブの熱も冷めやらぬうちに寒空の下、スタッフの面々から厳しい指摘を受けたのも無理はなかったのだ。(でも、なんで？ やった、やったぞ！頑張ったんだぞ！？なのになんでみんな渋い顔をしてるんだろ。これじゃあダメなのかな？)

YUKIは自分では、できる、と思っていた。ちゃんとライブをやっている、と。スタッフの苦みの混じった笑みや、肩を落としている恩田や浮かない表情をした五十嵐の心中がYUKIには今ひとつわからない。

新宿の夜の街のすえたにおいに、胸がつかえそうになる。しかし、それが街のにおいのせいだけではないことぐらい、YUKIにもわかっていた。

歌については誰も何も言わなかったからだ。

(みんなあたしの歌のことは言わない。なんでかなぁ……?)

顔をあげると真剣な眼差しでスタッフの話に頷いているTAKUYAの様子が目に入る。彼は自分と同じ年だという。

今日のライブ、きっとすごいプレッシャーだったんだろうなぁとYUKIは思った。

1993年3月1日、この夜は、TAKUYAがこのバンドに加わって、JUDY AND MARY初のライブだったのだ。

「でも、恩ちゃん、オーディションってなんか偉そうだね」

「YUKIちゃん、オーディションの場を用意してもらえるなんて、これはすごいことだよ。”適当にギターをぶっ込んどけ”じゃなくて、ちゃんとオーディションして自分たちで選べるなんて、すごいなあ」

この恵まれた状況に、恩田快人は心から感謝しているようだった。音楽業界のことはYUKIにはまるでわからないが、恩田の説明を聞くにつけ、自分たちは恵まれているのだなと思う。特に事務所が決まり、レコード会社が決定してからというもの、そう感じることが多い。

恩田とは彼がジャクソン・ジョーカーのメンバーだったころ、函館で知り合った。「音楽をやりたい」というYUKIの熱意を受け止めてくれたのも、「ちょっとパンクっぽいガールポップをやろうと思ってるんだけど、一緒にやってみない?」と声をかけてくれたのも恩田だった。

東京から函館の実家にデモ・テープが届くとそれに歌詞をのせて恩田のもとへ送るという作業を、半年近く続けた。その間にも彼は、インディーズで活動する手だてを整え、事務所にテープを送り、バンドをデビューさせるための下地作りをやってきた。

恩田は、バンドを作り始動させるために、どれだけの気力と体力がいるかを知り尽くしている男だった。

幸運を味方につけなければバンドは進まないこともまた、彼は熟知していた。周囲の助力へ、感謝を忘れないことも、だ。

池尻大橋にあるマックスタジオには、5人のギタリストが来ているという。一人ひとりと、「POWER OF LOVE」「BLUE TEARS」「JUDY IS A T∀NK GIRL」を実際に4人で合わせて演ってみる、それがオーディションのやり方だった。

鏡張りのスタジオには、長テーブルが置かれ、そこに事務所やレコード会社のプロデューサー、ディレクター、マネージャーが陣取っている。演りづらさはこっちも同じだと、YUKIは思った。緊張した。これではまるで自分たちもオーディションされているような気分だ。

「自分が審査する側にいるっていうのが不思議だな。面白いな」

これまでセッション・ミュージシャンとして名を馳せてきた五十嵐公太は、不思議そうな顔を見せる。

彼の上気した頬には、こういう場で、ドラマーとしての腕を試すと同時に鍛錬してきた者の凄みと余裕が浮かんでいた。

(……あたしは、歌いやすいかどうかで決めよう)

難しいことなど考えずに、気持ちよく歌おう。一緒に歌える人かどうかを感じよう。それに、と彼女は思った。

もちろんルックスも含めて、と。

長髪に年季の入ったレザー・ジャケット、自分仕様の完璧なエフェクター類にアンプと機材一式をそろえたロック野郎がやってくる。そのなかに、ギターだけ肩から下げて、気負いなさげな男がひとり立っている。短髪。全然ミュージシャンっぽくない。

尖った音、それでいて彼の演奏は軽やかだった。弾きまくるほかのミュージシャンとは明らかにタイプが違う。うたごころ、と言うのは簡単だが、彼はそれを知っているギタリストだとYUKIは感じた。

(歌いやすい!)

テーブルに陣取ったスタッフの向う、一面に張られた鏡のなかに映る自分たち４人の姿を見ながら、YUKIは思った。

恩田も五十嵐もそしてスタッフも、JUDY AND MARYのギタリストは満場一致で彼、TAKUYAに決まった。

「いや、あのオーディションは僕がみんなをオーディションしてましたから」

憶面もなくそう言ってのける彼のことが、YUKIは苦手だった。

いや、自分は嫌われていると思い込んでいたのだ。

恩田や五十嵐とはオーディションで会ったときから初対面とは思えないほど打ち解けていた彼が、YUKIにはまったく話しかけない。それどころか目も合わせようとしない。

(この野郎、ナメてんな。くー! むかつく——!! なんだよ、初対面の印象が良かったのは、恩ちゃんだけじゃん!)

そう、第一印象が最悪だったのは彼に限ったことではなかったのだ。

まだ函館と東京を行き来していたころ、初めて五十嵐公太と会ったときは、もっと最悪だったと、YUKIは思い出す。

「ボーカルをやることになるYUKIちゃん、19オ」

恩田の横で、サングラスをかけ黒の長いコートを着た五十嵐は、ポケットに手を突っ込んだまま不躾にも上から下までYUKIの容姿に目線を走らせる。

「あ、どーも。へえ。……ふーん」

(何よ、その目つき。なんなのよ、ふーんって!)

直立不動のまま、瞳だけ光らせているYUKIに、五十嵐は言った。

「恩ちゃん、俺さぁ、”19オで女のボーカル? イイじゃん。じゃあ、やる”って言ったけどさ、でも19? マジで～?」

オーバーオールに赤いパーカー、足元はドクター・マーチン。髪はショートでスッピンだった。YUKIはムキになってわざと大きな声で答える。

「はい、19です」

「な～んかなあ。想像してたのとぜんっぜん違う」

(ムカツク! じゃあどんなの想像してたっていうのよ!? っていうか、アンタ、すっげぇヤな感じ! もう最悪!)

これが五十嵐公太への第一印象だ。

その出会いから１年が経った今ではすっかり打ち解けて、年齢の離れている五十嵐は恩田と同じく、YUKIにとって頼れる存在だった。

もともとさっぱりした性格の男たちだけに、どんな事態に陥っても深刻ぶらない。彼らは大人だった。そこが、YUKIは救いだった。

今は話しさえしてくれないけど、いずれはあたしのことも仲間だってTAKUYAは認めてくれる——あのオーディションで、バンドみんなで音を合わせたときの感触を、YUKIは信じていた。